



陸軍少年飛行兵1期生 偵察専攻生徒(下志津飛行学校入校式)
前列右端が片岡喜作、中央が鈴木武次良、左端が古賀克己の各氏

振武特別攻撃隊長1 ～少年飛行生徒から飛行隊員、そして飛行学校教官～

海軍航空の町であった土浦。市内を闊歩する予科練生や霞ヶ浦海軍航空隊士官の制服姿を目にして土浦中学生。海軍士官学校や予科練を受験する生徒が出てくるのは当然の理でした。しかし、1931(昭和6)年の満州事変以降、陸軍の動向が世の注目を集めるようになると陸軍士官学校や陸軍飛行学校へ進む生徒も増えてきました。本号から、陸軍少年飛行兵第1期生として所沢陸軍飛行学校に入校、日中戦争で中国大陸を転戦後、飛行学校教官から第81振武特別攻撃隊長として沖縄で散華された片岡喜作氏(中学33回)の足跡をたどってみます。

誇りを胸に

片岡喜作氏は1915(大正4)年6月、片岡鉄造・しか御夫妻の二男として、つくば市玉取に生まれました。大曾根尋常高等小学校を卒業し、1929(昭和4)年4月、旧制土浦中学に入学。5年間玉取の実家から自転車通学。学校から帰るといつも離れの書齋で勉強をしていました。長身ですらりとした体格、無口でしたが、優しく、2人の妹(現飯田きよさん・沼尻まささん)思いの兄さんでした。中学卒業を1ヶ月後に控えた1934(昭和9)年2月1日、陸軍少年飛行兵第1期操縦生徒として、所沢陸軍飛行学校(現在は防衛医科大学が所在)に入校。応募者は操縦生徒が336名(定員70名の約48倍、茨城県からの合格者は2名)、技術生徒が639名(定員100名の約64倍、茨城県の合格者は3名)という難関でした。

飛行学校での生活は、5時30分の起床から21時30分の消灯まで、予科練同様分刻みの日課が組まれ、息つく暇もない毎日でしたが、生徒たちは少年飛行兵の誇りを胸に、厳しい教育・訓練に挑んでいきました。その結果、1年ほどで単独飛行ができるようになり、1935(昭和10)年3月15日の「いはらき新聞」には、「所沢少年航空兵 猛練習 偵察訓練飛行」との見出しで「所沢飛行学校少年航空兵生徒の操縦教育は狭山飛行場において練習実施されているが、各生徒の上達振りは著しく、既に練習機の単独飛行を終わつたので、来る15日より乙式一型偵察機の訓練飛行に移るため、第一班生徒30名は教官亀山大尉が引率して各務ヶ原飛行場に出張し、来る4月20日まで同地に滞在して猛練習を行うこととなった。」との記事が掲載されています。

片岡生徒は偵察分科専攻(他は戦闘分科と爆撃分科)となり、1935(昭和10)年11月27日、優秀な成績で所沢陸軍飛行学校を卒業、12月1日配属先の滋賀県八日市の陸軍飛行第3連隊から、千葉県下志津陸軍飛行学校に派遣され、同校に入校、空中偵察に関する実戦教育を受けました。

日中戦争、死闘30分の空中戦

1936(昭和11)年2月27日(二二六事件の翌日)に同校を卒業、伍長に任官し、陸軍飛行第3連隊第1中隊に復帰。同期生の鈴木武次良伍長は第2中隊、古賀克己伍長は第3中隊でした。この八日市での生活を後年、鈴木武次良氏は次のように記しています。

「私どもは自分の愛機(88式偵察機)を操縦して琵琶湖上空狭しと飛びまわった。3人揃っての外出となると町中の女生の憧れの的で、もてたものだった。1937(昭和12)年9月9日、(7月に勃発した)日支事変(日中戦争)のため第3連隊に動員令が下命された。思えば着任以来、八日市の三羽鳥として羨望された僅か1年半が私どもの青春時代であったとは……」(『陸軍少年飛行兵史』操縦1期生徒の歩み)より

片岡伍長も飛行第3連隊で編成された飛行第7大隊の隊員として天津に進出、軍曹に昇進し、中国各地を転戦、大空の戦いに挑んでいきました。

なかでも、1938(昭和13)年5月、徐州攻略作戦に参加、15キロ爆弾を搭載した88式偵察機で徐州停車場を爆撃、その後の敵偵察中に騰県上空で敵戦闘機(イ15号機)5機の攻撃を受け、同乗の大内少佐は旋回機銃で応戦、さらに伝声管を握りしめて操縦士の片岡軍曹に飛行コースを指示し続けましたが、8発の機関銃弾を

受けて壮烈な戦死。しかし片岡軍曹は巧みに機を操り、超低空飛行、旋回に次ぐ旋回で敵機を振り切り、見事に基地に帰還したことは、特筆に値する戦功でした。機体、機翼に100余発の敵弾を受け、翼は滅茶滅茶に壊れていました。その翼の裏側には低空飛行の際に木立でこすった痕が無残に残り、飛行機の命綱ともいえる操縦索は半分ほど切れていました。30分間の死闘を物語る惨憺たる姿の片岡機でしたが内地に運ばれ、天覧の栄に浴しました。さらに、終戦まで所沢の航空資料館に展示され、御両親も見学に赴いています。

1938(昭和13)年8月には飛行第7大隊が飛行第75戦隊に改編され、漢口作戦、奥地侵攻作戦(重慶、宜昌等)及び敵航空基地攻撃等に参加、激戦を戦い抜いてきました(1938年9月29日には陸軍歩兵であった長兄盛之亟さんが中国戦線で戦死されました)。

渾身一体

飛行第75戦隊は武昌飛行場に前進し、片岡曹長(1938年に昇進)も第一線で戦い続けましたが、病を得て1940(昭和15)年4月に帰国、熊谷陸軍飛行学校付教官(助教)となり、後輩となる少年飛行兵たちの教育に当たることになりました。

熊谷陸軍飛行学校で片岡曹長が助教として最初に担当したのが、陸軍少年飛行兵第6期生の4人でした。着任の日に片岡曹長は4人を集めて、「今日、命によって4人の操縦教育を受け持つことになった。自分は今までずっと戦地にあつて御奉公していた者で、この度帰還して学校付となった片岡である。皆と同じ少年飛行兵1期出身である。助教としては初めであるから充分指導できないかも知れ

ないが、戦地で鍛えた熱と意気とで皆を教育してゆくつもりである。皆も助教と渾身一体となつて精進することを希望する。」と挨拶されました。その4人の生徒の1人であった田村恵治氏はその時の印象を、「助教殿の眼に底力があつた。なるほど戦場を駆け巡つてこられた人だけはあると思つた。」と記しています。片岡曹長は決して荒々しい言葉で注意することはなく、懇切に生徒達が解るまで説明指導していきまされた。そのため、生徒たちは先輩から操縦教育を受ける事ができるのが非常に嬉しく、大きな希望を持つて教えを受けていました。田村氏は、片岡曹長と渾身一体となつた精進の日々を次のように記しています。

私は5年5ヶ月の操縦生活中、片岡曹長のような立派な先輩に出会つたことがない。〔『陸軍少年飛行兵第6期会報』〕。4人の生徒と別れた後、片岡曹長は熊谷陸軍飛行学校館林分教場付教官となり、軽爆撃機専攻生徒の教育に当たつていましたが、同年12月に少尉候補者学生(21期生)として所沢の陸軍航空士官学校に入校しました。翌1941(昭和16)年7月同校を卒業すると、銚田陸軍飛行学校に尉官学生として入校し、主として軽爆撃機あるいは襲撃機を専修しました。



熊谷陸軍飛行学校
昭和9年8月、熊谷陸軍飛行学校、所沢航空技術学校が創設され、陸軍少年飛行兵操縦生徒は、2期生より熊谷飛行学校に移転し、操縦訓練を受けた



88式偵察機：昭和3年採用。満州事変から日中戦争初期まで活躍し、昭和初期を代表する陸軍機で、生産機数1,117(含軽爆型)は当時の国産機としては破格の数を誇る。
エンジン：川崎一式450馬力発動機(BMW-6)水冷V型2気筒 速度：最大220km/h
航続時間：最大6時間 武装：7.7mm後方旋回機銃1(軽爆型の爆弾最大200kg)

片岡曹長に出会い、教えを得たことは今でも無上の幸福者であつたと思つている。

銚田陸軍飛行学校

陸軍における航空爆撃の教育と研究は当初、所沢の陸軍飛行学校で行われてい

ましたが、1925(大正14)年5月、陸軍初の爆撃隊として飛行第7連隊が浜松に設立されると、同連隊内の練習部で行われるようになりまし。しかし1933(昭和8)年に浜松陸軍飛行学校が開設されたため、爆撃に関する教育と研究は同校で行われるようになりまし。この間、重爆撃機(大型で1トン程度までの爆弾を搭載でき、航続距離も長い爆撃機)と軽爆撃機(中型か小型で爆弾搭載量は500kg程度と小さいが、軽快な運動のできる爆撃機)に器材、用法の違いはあつても、同一の飛行場で訓練を実施してきまし。しかし学生の増員に伴つて使用機が増え、訓練空域も狭く支障をきたすようになりまし。そのため1940(昭和15)年12月に浜松陸軍飛行学校内に銚田陸軍飛行学校を併設し、重爆分科と軽爆分科とに分離し、翌1941年1月、銚田陸軍飛行学校を茨城県鹿島郡(現銚田市大竹)に移転、独立させ、銚田を独立した軽爆専門の学校としまし。飛行学校および飛行場は、北浦と太平洋の鹿島灘に挟まれた広大な地域に設けられ、敷地となる山林および耕地の大半は買収され、住民は移転を余儀なくされました。

銚田陸軍飛行学校では、軽爆撃飛行隊幹部の訓練が行われていましたが、アジア太平洋戦争の戦局が厳しくなると、1944年(昭和19)年6月、銚田陸軍飛行学校は銚田教導飛行師団に改編され、従来の学生教育に加え、敵機来襲の情報があれば直ちに攻撃の体制をとることになりました。10月22日には、教官や助教によつて陸軍初の特別攻撃隊が編成され(隊長は岩本益臣大尉)、10月末にルソン島へ進出。現地で「万朶(ばんた)隊」と命名されました。11月12日、海軍の神風特攻隊に遅れるこ

と3週間の後に4機が初の特攻出撃を行い、以後12月までレイテ湾への出撃を続けまし。

万朶隊の特別攻撃は、地元の人々に大きな反響を巻き起こしました。鹿島郡常会では「特攻隊の偉業に続けと60機建造貯蓄運動」を展開し、目標達成決議を行っています。また銚田国民学校では朝礼時の挨拶の言葉を従来の「く」をしっかりと「れ」から「く」を体当たり」に改めました。万朶隊に続いて、1944(昭和19)年のうちに、第5・第8・第11八紘隊が特別攻撃隊として編成されましたが、その中には、戦地まで赴き整備や通信の任務につく軍属も含まれていました。

1945(昭和20)年には、銚田陸軍飛行学校に関する特攻隊として、第45・第63・第64振武隊、第201・第255神鷲隊が編成され、出撃した兵士の多くが沖繩海上や鹿島灘東方洋上で散華しました。

同年7月には銚田教導飛行師団は作戦任務の第26飛行団と教育研究任務の第3教導飛行団に再度編成替えになりましたが、8月15日に終戦となり、銚田陸軍飛行学校は開校以来4年余りで閉校となりました。(高21回 松井泰寿)

参考

- 『紺碧のあなたに 特攻戦死者の記録』(群馬県少飛会編 1993年発行)
- 『血戦 部隊長の手記』(時代社 1941年発行)
- 『銚田市史 通史編下巻』(銚田町史編さん委員会 2001年発行)
- 『茨城県の戦争遺跡』(伊藤純郎編 平和文化 2008年発行)

土浦市立博物館テーマ展案内

「戦争の記憶」

—土浦ゆかりの人・もの・語り—
12月6日(日)まで